Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-21

元首政期ローマ帝国におけるギリシア都市間の相互不和と帝国統治

西又，悠

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2025-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第9080号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496361

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目　　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

元首政期ローマ帝国におけるギリシア都市間の相互不和と帝国統治

氏　　名　：　西 又　悠

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名　（主）佐 藤　昇　　教授
（副）小 山　啓 子教授
（副）茶 谷　直 人教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

要旨

本研究は、元首政期ローマ帝国下のギリシア本土および小アジアを対象とし、この地域に存在したギリシア諸都市間の相互不和と、そこに関与するローマ帝国の統治のあり方を考察したものである。

元首政期のローマ帝国は、いわゆる「ローマの平和」と呼ばれる安定した時代を迎えた。この時期のローマ帝国は各地に存在した都市を活用し、それらに自治を認めながら、地方の秩序維持を担わせることで、広大な版図の統治を可能としていた。また同時に都市は、ローマ帝国中央から派遣される総督などの統治業務を補完する役割を担い、徴税業務やローマ軍に対する人員や物資の提供などを通じて、ローマ帝国統治を支えていた。このように都市が帝国統治において、重要な役割を担っていた背景には、ローマ帝国が十分に整備された官僚機構を持たない「小さな政府」であったという事情が存在した。

ローマ帝国の広域統治は、このような都市と皇帝や属州総督といった帝国側とのコミュニケーションによって支えられていた。皇帝と帝国内の様々な階層（属州総督や騎士身分の官僚をはじめ、都市やその連合体である属州会議、各都市の指導的市民）の間では使節の往来と、それに伴う書簡や勅答の往来が頻繁に行われ、それを通じて帝国統治は実現されていた。

しかしながら、都市は単に帝国の統治を受け入れ、その一端を担うだけの存在ではなかった。各地の都市は、上述のような皇帝や属州総督との交渉を通じて、自都市が有する特権の承認や、新たな特権の授与など利益の確保・増大を図っていた。そして、個々の都市が自律的に利益を追求する中で、相互の利害対立が生じ、相互不和の状態に陥ることも珍しくなかった。このような都市間の相互不和と、それに対してローマ帝国がどのように対応しようとしたのかを検討することは、単に帝国と都市という縦軸の関係だけではなく、そこに都市間という横軸を加えて、より具体的に帝国統治の実態を明らかにすることに繋がると考えられる。そこで、本研究では都市間の競争や対立といった現象が顕著であった、ギリシア諸都市に焦点を当て考察を行った。

序章第 2 節では、ギリシア諸都市の相互不和に関する学説史を整理し本研究の課題を設定した。これまでのギリシア諸都市の相互不和については、主に小アジアにおける都市の名誉称号をめぐる競争が注目されてきた。かつては虚栄心に基づく愚かな振る舞いと考えられていたこのような競争は、今日ではローマ帝国との紐帯や、名誉称

号に付随する特権などをめぐる競争であったと理解されている。特にエレールは軍事行動による利益追求ができなくなったギリシア諸都市が、それまでの土地の領有をめぐる争いから、名誉とそれに伴う実利を求めて盛んに競争するようになったと指摘した。このような考え方は決して的外れではないが、それでも問題点は残されている。ミラーやバートンが指摘するように、武力行使を伴わなくとも、土地を巡る係争はなお残っていたので、必ずしも競争の形態が変化したとは言い切れないのである。むしろギリシア諸都市は、様々な手段で、自己の利益を拡大しようと努めていたように思われる。またこれまでの研究では、こうした様々な競争や対立の時期や局面ごとの差、つまり争点は変わったのか、関与するアクターに変化は生じたのか、競争や対立の手法はどのようなものであったのかといった点を具体的に問うことが少なかった。

そこで本研究では、第 1 章で属州アシアにおける皇帝礼拝をめぐる都市間の競争、第 2 章でギリシア本土の諸都市に見られた土地係争、そして第 3 章では、都市間の相互不和の際に都市内でどのような動きが見られたのかを、事例ごとに分析するという課題を設定した。これらの検討を通じて、都市間関係からローマ帝国統治の様相を明らかにしようというのが、本研究の目的である。

第 1 章では、属州アシアの諸都市を対象に皇帝礼拝をめぐる都市間の競争や、そこから生じる対立について検討を加えた。皇帝礼拝は、元首政期に帝国各地で見られた宗教儀礼であるが、とりわけ属州アシアでは盛んであり、各都市が皇帝礼拝を実施する権利を求めて競争していた。本研究ではこの皇帝礼拝を、さらに礼拝の設立（ネオコロスの獲得）に関する局面と、儀礼などをめぐる局面に分けて考察し、時期や局面による、競争方法や争点の違い、また関与するアクターの変化について考察した。

まず第 1 節では、皇帝礼拝の設立局面に注目し、前 1 世紀から後 2 世紀にかけて通時的に史料を検討した。その結果皇帝礼拝の設立局面では、元首政初期こそ多くの都市が参加し、混乱が生じていたが、時代が下るにつれて競争の範囲は有力な都市に限定されるようになり、2 世紀の半ばになると、いったん皇帝礼拝の設立をめぐる競争は下火となったことが明らかとなった。

代わって、2 世紀には儀礼に関連する競争の事例が史料に現れるようになる。この競争ではアシアを代表する有力都市、すなわちエフェソス、スミュルナ、ペルガモンの三都市が競争を繰り広げていた。新たな競争の背景としては、2 世紀に入ってこれらの都市がネオコロスの獲得回数で並び、それだけでは優劣をつけにくくなったからでは

ないかと考えられる。彼らは皇帝礼拝の実施に伴う外交上のやり取りの中で、相手方の名誉称号を書き落とすといった問題行動のために相互に対立し、結果的に皇帝の仲裁を受けるといった事態を引き起こしていた。また皇帝礼拝の際に行われる祭礼行列の先頭を歩く権利をめぐっても対立していた。この対立を解消すべく、各都市の代表が集うコイノン（属州会議）の場で演説を行った、ギリシア知識人アイリオス・アリステイデスの言説からは、こうした有力都市間の相互不和が属州内の他の都市をも巻き込んで党派争いの様相を呈していたことが窺える。

このように皇帝礼拝をめぐるギリシア諸都市の競争は、常に一様であったわけではなく、局面や時期に応じて、その競争の範囲や争点が変化していたことが明らかとなった。またローマ帝国は、ギリシア諸都市の置かれた状況や相互の関係性に配慮しながら、競争や対立が過度に深刻化しないよう努めていたと考えられる。

次に第 2 章では、ギリシア本土の諸都市の間で生じた都市係争とローマ帝国による裁定を分析した。ここでは係争の具体的な様子を確認しつつ、ローマ帝国による裁定業務がどのようにして行われていたのか、そしてローマ帝国の下した裁定に対するギリシア都市側の対応を考察し、都市間の対立とそれに対するローマ帝国の統治姿勢を明らかにしようと試みた。

第 1 節では、1 世紀から 2 世紀にかけて、展開や裁定内容が比較的よくわかる係争事例を時代順に検討した。その結果、ローマ帝国は、当事者を含めた公聴会や実地調査、また過去の記録の照会といった、慎重な裁定業務を行っていることが明らかとなった。ただ上意下達式に決定を押し付けるのではなく、丁寧に調査を行うことで、勝訴側、敗訴側の双方が裁定に納得し、結果として長期的な秩序の維持が達成できるようにしていたと筆者は考える。

第 2 節では、ローマ帝国の裁定に対するギリシア都市側の対応を検討した。その結果、スパルタやメッセネ、またボイオティア地方のコロネイアやティスベなどは、ローマ帝国の裁定を利用して、係争相手を訴えるという行動をとっていたことが判明した。その結果、係争はしばしば再燃し、長期化することもあった。しかしこれは、ギリシア諸都市がローマ帝国に対して反抗的であるということを意味しないと考えられる。むしろ彼らは、ローマ帝国の裁定の有効性、その権威を認めているからこそ、相手がそれに従わないとして、非難していると考えるべきであろう。ギリシア諸都市は、ローマ帝国の決定を利用しながら、自分たちに有利なように係争を処理しようとしてい

た。

そして第 3 章では、都市間の相互不和が発生した際の、都市内部の動向を検討した。

元首政期においても、ギリシア諸都市では民会での議論や決議がなされており、政治的な意思決定が行われていた。しかしながら、外交上の問題が生じた時に、都市内でどのような対応がとられていたのかについては、十分に考察されてこなかった。そこで、本章では、ギリシア知識人ディオン・クリュソストモスの弁論を手掛かりに、タルソスとプルサ、そしてアパメイアの紛争時の動向、および指導的立場にあるディオンその人の果たした役割を検討することとした。

第 2 節では、タルソスやプルサを対象に、紛争時の都市内の市民団の様子を分析した。その結果、都市内には、紛争解決をめぐって複数の意見が存在しており、都市間での交渉の前に、まずは都市内での合意形成を図る必要があることが明らかとなった。

続く第３章では、ディオンその人がいかなる局面で活動しているのかを考察した。彼の弁論は民会で行われており、その趣旨は、紛争中の都市と和解し、関係を改善するよう促すことであった。外交使節としての任も務めているが。むしろディオンの役割は、都市内合意形成を促すことにあったと思われる。

以上の分析から、都市間の相互不和が生じた際の様子が明らかとなってきた。ギリシア諸都市の対立や競争は時期や、その局面に応じて、争点や競争の範囲が変化するものであった。またそのような対立にたいして、ローマ帝国は上から押さえつけるのではなく、都市側にも配慮した方法で仲裁を試みていたことも明らかとなってきた。またディオンに代表されるようなギリシア知識人たちは、常にローマ帝国を意識し、帝国の秩序を壊さないように、対立の激化を抑えようとしていたことを確認した。

そして本研究の最終的な結論として、帝国による統治という秩序を毀損しないように注意しながらも、現状を変更して利益を得ようとするギリシア諸都市と、それを穏便に抑えようとするローマ帝国の関係が「ローマの平和」を形作る一つの要因となっていた点を指摘した。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	西 又 悠
論　文　題　目	元首政期ローマ帝国におけるギリシア都市間の相互不和と帝国統治

要　　旨

本論文は、元首政期ローマ帝国におけるギリシア都市間の紛争解決について論じたものである。元首政期（前 1～後 2 世紀）のローマ帝国は、領域内で「ローマの平和」とも称される繁栄と安定を実現した。その安定をとりわけ享受したギリシア諸都市については、近年、研究が厚みを増し、帝国支配下にあってなお旧来の自立性、活力を維持していたと主張されるようになった。しかし、都市が自己利益を追求する行動をとれば、周辺諸都市との不和、紛争、訴訟など秩序攪乱にも繋がりかねない。こうした現象については先行研究も等閑視していた訳ではないが、主として都市間対立の不毛性、あるいは帝国側の干渉姿勢ばかりが注目されてきた。それに対して本論は、不和の原因を類別し、関係するアクター間の複層的関係（都市間関係、都市・帝国関係、周辺都市との関係）に注目しながら、地域差や通時的変化について詳細に検討することで、都市間の紛争が実際にはいかにして解決されたのか、秩序の安定状態がいかにして保たれていたのかを明らかにし、「ローマの平和」の実態を解明しようと試みたものである。

序章では、先行研究に即してローマ帝国の地方統治体制が的確に説明されるとともに、先行研究の検討を通じて、都市間紛争研究の必要性が説得的に示された。すなわち、広大な領土を支配下に収めたローマ帝国は、各領域にごく小規模なスタッフしか派遣せず、地方統治はおよそ各地に存在した「都市」に委ねられることとなった。帝国の一員として中央の統治に与することになった地方都市は、旧来保持していた自治、自立性を相当程度維持することとなり、それにより自らの利益を確保、拡大することも可能となった。しかし自己利益の追求は、しばしば周辺諸都市との不和、対立という事態も引き起こした。本論によれば、旧来、こうした現象については主に、帝国中央がいかに対処していたのか、あるいは帝政下の都市間紛争全体は無益な名誉争いに過ぎなかったのではないか、といった視点からの研究が行われてきた。しかし、これらの研究では、紛争に関与する複数のアクターの相互関係や、紛争の地域差、通時的変化を正確には捉え切れず、「ローマの平和」の陰に隠れたダイナミズムを正しく理解することはできないとの指摘がなされた。

第１章では、属州アシア（小アジア地方）で展開された皇帝礼拝をめぐる競争を原因とする紛争が対象とされた。分析には、碑文や貨幣、歴史叙述、アリステイデスの弁論などが用いられた。先行研究でも、この地域で皇帝礼拝をめぐる紛争・競争があったことについては指摘されていたが、一括して名誉争いとして扱われるなど、十分な考察が行われているとは言えない状態にあった。本論では、ネオコロス（属州における皇帝礼拝主催都市）の地位をめぐる競争・紛争と、皇帝礼拝をめぐるそれ以外の名誉競争・紛争の二つに分類し、それぞれの状況について通時的変化を具に検討した。その結果、二代皇帝ティベリウスの時代には多くの都市がネオコロスの座を得ようと競合し、収拾がつかぬほどの紛争にまで発展したが、帝国側が財政事情などに即した合理的な判断を下すと、その後は、有力都市が都市エリートを利用して水面下で誘致合戦を行うことこそあったものの、紛争激化に至ることはなかった。他方、儀礼の順番や称号の扱いなど、その他の名誉をめぐっては、帝政の初めから競争が行われてはいたものの、むしろネオコロス競争が収束を見せたのちに、帝国が干渉せざるを得ないほどに紛争として表面化してきたことが指摘された。

主査記載 氏　　名	佐 藤　昇

第2章では、属州アカイア（ギリシア本土）でたびたび生じていた、土地の境界をめぐる紛争が分析対象とされた。現存する碑文史料と関連の文献史料を丁寧に読み解くことで、帝国がいかなる姿勢で紛争に介入したのか、帝国の裁定を都市側がいかに利用したのかを明らかにした。すなわち、境界をめぐる不和はしばしば都市間の対立を煽り、帝国の介入を招くに至ったが、通説が主張するように属州総督が積極的に介入している様子は確認できず、属州会議など、別の主体が帝国側の窓口となっていたことが明らかとなった。また帝国の介入についても、紛争都市双方が納得できるよう、当事者双方が関与する形で議論や調査が行なわれていたことが明らかにされた。さらに都市側については、帝国の権威の下に裁定が下されることを望みつつも、ときに消極的姿勢を見せ、ときに問題を再燃させ、状況に応じて自都市の利益確保を図ろうとしていた様子が確認された。総じて、秩序の長期安定を望む帝国と権威を望みつつも自己利益の追求を図るギリシア都市の間で複雑な力学が働いていたことが明らかとされた。

第3章では、ディオン・クリュソストモスの民会演説が対象とされ、帝政初期の知識人が都市間紛争にいかに関与していたのかが分析された。ディオン・クリュソストモスについてはこれまでにも、都市同士が対立した際、両者の和解を仲介する役割を担っていたこと、またその背後に皇帝との私的関係があったことなどが指摘されてきた。これに対して本章では、ディオンの弁論を精査することにより、そもそも都市内部が一枚岩ではなく、ローマの介入による解決を望むグループ、介入を望まず都市間での和解を望むグループ、さらには武力行使による利益追求を望むグループさえ存在していたこと、そしてディオンが皇帝との関係性ばかりではなく、むしろ政治情勢に関する知識を背景に、都市間での解決を、都市内の民会において提言できる人間として紛争解決に貢献していたことを明らかにした。

終章では、各章の分析結果が確認された上で、結論として、紛争の様相、紛争解決の方策が時期や地域によって異なっていたこと、ローマ帝国が都市の相互不和を解消するべく、対立する都市双方が納得できるような形での介入を意識していたこと、都市側は状況に応じて帝国中央の介入をときに積極的に利用し、ときに距離を取り、自都市の利益を確保、拡大できるように振る舞っていたとまとめられている。

以上のように、本論文では元首政期のギリシア世界における都市間紛争について、関連する史料を悉皆的に調査した上で、論点を整理し、紛争原因に応じて、地域、時代ごとに変化があったこと、紛争解決に関与するアクターごとに、それぞれの意図、利益に応じた行動が見られ、「ローマの平和」の裏側に複雑な力学が働いていたことを、具体的に明らかにしている。史料批判、史料操作もおよそ的確に行われ、分析に当たっても個別の問題点を多角的かつ慎重に掘り下げており、個々の議論は十分に説得的である。他方、元首政期におけるギリシア世界の紛争の特性や当該期の「ギリシア世界」に共通する要素など、十全な説明を尽くせていないところもある。そうした点はあるにせよ、本研究は、元首政期ローマ帝国のギリシア統治の実態を研究したものとして、実証的な事例分析を集積し、また紛争と安定の関係性を新しい観点から具体的かつ多角的に解明したものであり、重要な知見を得たものとして価値ある研究であると評価できる。よって、学位申請者西又悠は、博士（文学）の学位を得る資格があると認める。

審査委員

区　分	職　名	氏　　名	区　分	職　名	氏　　名
主　査	教　授	佐藤　昇	副　査	教　授	茶谷　直人
副　査	教　授	高田京比子	副　査	同志社大学 文学部 准教授	岸本　廣大
副　査	教　授	小山　啓子			